2023.6.19　『祇園祭 2022』を再掲

シリーズ《生き続ける文化財》　：　『祇園祭』2022

今年はどっちだろう？　大船鉾には舳先が大金幣と龍頭の 2 つあり、隔年交代でつけてきました。2018 年が白木の龍頭、19 年が大金幣だったのですが、20 年はコロナで鉾建てや巡行が中止となり、この年金色に彩られた龍頭は出番を失って、7 月は町会所の 2 階から新町通を眺めていました。21 年は鉾が建ち金色の龍頭をつけた大船鉾が登場しましたので、今年はどうなるのでしょうか。

こうして祇園祭 34 基の山鉾たちは、この日を待ちに待ったのです。

《ご紹介》

今年の話題は、なんといっても鷹山復帰だ。コロナ禍で巡行が中止される前の 2019（令和元）年に唐櫃で巡行に参加し、3 年後の今年、196 年ぶりに復帰したのだから当然だ。10 年前に「鷹山の歴史と未来を語る会」を住民らが立ち上げ、14 年に囃子方復活。翌年「鷹山保存会」発足、16 年公益財団法人に。鷹山本体は、保存会が 18 年に基本設計案をまとめ、翌年 10 月に木部設計案が決まり、櫓・車輪・石持は古いものを使用することで、本格復興に大きく動き出した。

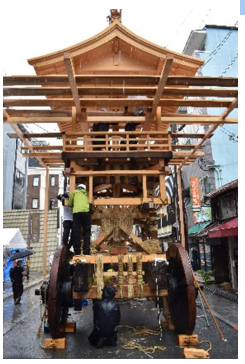
懸装品では、18 年トルコ製じゅうたん購入、イラン製じゅうたんの「胴懸」が 21 年 2 月完成、今年 3 月までに水引・裾幕・木製の雉を制作。5 月には京丹波町で鷹山試し曳きが行われ、報道機関が一斉にその様子を報じた。

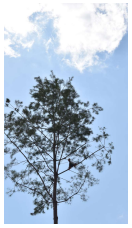
祭り本番は、後祭巡行列 10 番目に高さ約 19 メートル・総重量 10 トン超の鷹山がくじ改めを終え、御池通を東山に向かって 2 世紀ぶりに巡行を開始した。

鷹山が復帰した今年の山鉾巡行は、コロナ禍で 3 年ぶりとなる。振り返れば、山鉾巡行存続の危機は何度もあった。応仁の乱（1467 年から 77 年）では、京都の町とともに山鉾もほとんど焼き尽くされたが、乱勃発から 33 年後の 1500（明応 9）年、町衆が力を合わせて山鉾を復興させた。このとき前祭 26 基、後祭 10 基の山鉾が巡行したとされており、これが現在の基礎になったという。

1533（天文 2）年には法華一揆により神輿渡

➢　鷹山巡行準備（左：曳き初め・右下：山建て）





松に鷹
二世紀ぶりの山飾り

➢　山鉾巡行

御などが中止されたが、「神事これなくとも山鉾渡したし」との下京 66 町の申し出により、山鉾巡行は行われた。

江戸時代には、宝永の大火（1708 年）、天明の大火（1788 年）、幕末の蛤御門の変（1864 年）と 3 度の大火災があり、町も山鉾も甚大な被害を受けたが、天明の大火では 20 年ほどかけて山鉾が順次復興されるなど、都度復興された。

明治になって祇園祭を維持する制度的な危機があった。それは「寄町（よりちょう）制度」の崩壊である。江戸時代には、山鉾町周辺の町々が特定の山鉾の寄町となって山鉾経費を援助する寄町制度があったが、明治維新により 1872（明治 5）年にこれが廃止され、寄付金もなくなって各町は財政難に陥り、山鉾の維持存続が危ぶまれた。そこで、75（同 8）年に山鉾巡行や神輿渡御の経費を援助する協賛組織として清々講社が結成され、1923（大正 12）年には山鉾町連合会（現在の山鉾連合会）を組織し、各山鉾の維持と巡行を支えてきた。

また明治時代には、当時流行した疫病のコレラにより山鉾巡行の日程が度々変わった。1822（文政 5）年に日本へ初侵入したとされるコレラが明治になって大流行し、祇園祭は 79（明治 12）年、86（同 19）年、87（同 20）年、95（同 28）年の 4 度にわたって日程変更を余儀なくされたという。なかでも明治 28 年には、7 月 9 日に山鉾建てが始まったが、10 日に京都府から祭礼差止めの布令が発出され、「12 日鉾取崩」になったと伝えられている。同年 9 月に清々講社から山鉾巡行実施の依頼があり、鉾町協議の上実施することとなり、日程は平安遷都千百年紀念祭（10 月 22 日より 3 日間開催）に合わせて 10 月執行となった。結果、神輿渡御は 10 月 11 日（前祭）と 18 日（後祭）、山鉾巡行は両祭併せて 18 日に実施している。

太平洋戦争のときには、山鉾巡行が 1943（昭和 18）年から 4 年間中止されたが、47（同 22）年に長刀鉾と月鉾が建てられ、長刀鉾が四条寺町まで巡行した。終戦の詔（玉音放送）は 45（同 20）年 8 月 15 日だから、戦後の巡行中止は 1 回だけだ。

➢　神輿渡御

明治以降の近代化の進展により、道路上空に敷設される電線や路面電車の架空線が山鉾巡行の妨げとなり、山鉾巡行の存廃が議論になった。明治後期の巡行は電線を逐一取り外すことで対応していたが、明治末の四条通拡築及び市電敷設では、市電の架空線はそうした措置はできないと主務官庁から巡行中止命令が出された。しかし、それで巡行存廃の議論が沸騰し、結局、中止命令はいったん棚上げされて継続審議となり、巡行が継続された。

このように歴史を辿れば山鉾巡行の継続の危機は何度もあり、コロナ禍もその一つではあるが、関係者の強い想いと市民らの幅広い支援により、今回も切り抜けることができた。

万緑に黄金差し上げ御神幸